

<辛口時評>

人が国を選ぶ時代

つい先日の午後（と言ってもアメリカでの衝撃的なテロ事件の前なので、今では旧聞の感もするが書いておきたい）、私は東横線で横浜へ向かっていた。とある駅で十数人の大学生たちが乗り込んできて、3人ほどが私の席の前に立った。いままでの続きらしい会話が弾んでいる。聞くとともに聞いていると次の会話が耳に飛び込んできた。

「日本経済はどうなっちゃうんだよ。就職はヤバイぜ」「まるで底なしだよ。あの松下まで大リストラだからなあ。また氷河期だよ」「オレ、考えているんだけど、日本がダメなら中国で就職しようと思うんだ。中国はこれから西部大開発が始まるし、経済はまだまだ伸びていくから仕事はいっぱいあると思うよ」「エッ、お前本気かよ」「もちろん本気さ。中国語の勉強もやってるよ」「なるほど、そういう手もあるよなあ」

正直言って、私はこの会話にショックを受けた。「日本がダメなら中国に働きに行く」という若者の言葉が、私の脳裏に焼きついた。グローバリズムやボーダーレスについての議論が喧（かまびす）しいが、すでに若者たちは意識の上でいとも簡単に国境を超える発想をしている。まるで日本のどこかの地方へ働きに行くような感覚なのだ。

もちろんこんな考えをもつ学生はまだ極めて少数かもしれない。しかし、こうした意識が若者の間に芽生えていることに、私は2つの意味で大きな時代の変化を感じる。一つは、グローバリズムはもはや多くの若者の間で日常的な意識の一部になっているのではないか。もう一つは、中国経済の躍進によってアジアにおける日本と中国の関係に構造変化が起きており、それが若者の意識に反映してきているのではないか。日中間の政治はギクシャクしているが、経済は一体化しつつあるということだ。多くの大学でドイツ語、フランス語を凌いで中国語を選択する学生が急増しているのも、こうした時代の変化を反映しているのかも知れない。いまだに中国軽視・蔑視（べっし）の偏見から脱けきれない人の多い中高年世代とは別の中国観が、若者たちの間に芽生え始めているようだ。

同時に、私はいささか複雑な想いにも駆られた。つまり、次代を担う夢多かるべき若者たちに、まっとうな仕事の間、夢を描ける精神的空間を与えられない日本の現状への焦慮をかきたてられたからだ。それはベンチャー企業育成、新産業創造の仕事に携わる自分自身への頂門の一針にも感じられた。若者に「国離れ」を起こさせている国とは一体何か、という想いも募った。

グローバリズムの論議のなかで、「これからは企業が国を選ぶ時代になる」と言われたが、いまやさらに進んで「人が国を選ぶ時代」が始まっているのかも知れない。優秀な高校生たちが米欧の

大学に進学し始めている。優れた研究者の海外流出も続いている。スポーツ界にも「イチロー現象」が起きている。最近、元の勤務先を特許権確認で提訴して話題になったが、失意の時アメリカの大学にスカウトされた青色発光ダイオードの発明者・中村修二さんは「日本に戻る気はない」と言い切っている。中国はじめ海外に就職の場を求める学生や企業OB、リストラされた技術者・経営専門家たちも増えている。

日本は人材しか資源のない国なのに、その貴重な人材資源が日本の沈滞と閉塞(へいそく)を嫌って、あるいはリストラで居場所を失って「日本離れ」を起し始めている。人材・頭脳流出がどんどん進むようになったら、日本の将来にとって由々しき事態だ。アメリカ経済の活力源の一つが海外からの豊富な人材流入にあることは周知の事実だが、アメリカと違ってハードパワー(軍事力など)ではなく、ソフトパワー(経済、科学技術、教育、文化など)で生きるしかない日本こそ人材流入国にならなければならないはずだ。

テロ事件いらい「外からの脅威」に対抗する有事立法や自衛隊による米軍支援立法など「戦争前夜」の雰囲気漂い始めているが、国の安全にとって長期的・根本的に大切なことは「内なる脅威」である人材の「空洞化」や「立ち枯れ」をなくすことであり、そのためには若者が大志を抱ける社会を築き、海外からの人材流入が自然に起こるような国の魅力、ソフトパワーをどう高めるかにあるのではないか。